

Fuji Sankei **Business i.**

企画特集

世界のバイオ技術をリード

日本生物工学会会長

大阪大学大学院工学研究科教授

原島 俊氏に聞く



6月1日付で日本生物工学会の会長に就任した原島俊・大阪大学大学院工学研究科教授に、今後の運営やバイオ技術の将来展望を聞いた。

——新会長の抱負を

「3つの方針を掲げた。4月の公益社団法人化を機に、社会へのさらなる貢献を目指す『学から産へ』、世界に向けたプレゼンス向上を目指す『国内からアジアへ、そして世界へ』、世界につなぐ人

材育成を目指す『シニアから若手へ』だ。公益事業を拡大し、世界のバイオ技術をリードしながら産業界の活性化に寄与したい」

——日本のバイオ技術水準をどうみる

「レベルは高い。たとえば発酵

によるアミノ酸生産は日本のお家芸といわれてきたが、今も世界トップ。アジアでは韓国や中国が台頭してきたが、当学会はアジア各国と友好的に連携していくと同時にリーダーシップを発揮したい」

——いま最も注目するバイオ技術は

「今までにはなかった微生物の新しい育種技術が次々と開発されてきている。これまで、育種には多大な時間がかかるといわれてきた。しかし、一挙に多くの遺伝子の発現を操作して、短時間でベストの突然変異体に到達する技術が開発されつつある。バイオの要素技術の中でも育種技術は中心的な技術のひとつなので、革新的な育

種技術が開発されれば、波及効果は非常に大きい」

エネルギー問題も解決へ

——バイオ技術はエネルギー問題の解決にも貢献できる

「バイオの技術を使って、バイオマスからエタノールやディーゼルのような燃料を製造することで、バイオはエネルギーにも貢献できる。また、これまで石油をベースに生産していた多様な化成品などを、バイオマス（生物資源）からバイオの力で作る、いわゆる『バイオリファイナリー』も今後の大きな課題だ」

——技術の進展は人材がカギを握る



「バイオは、まだまだわからないことの方が多く、発展途上で夢のある分野である。しかし、博士課程を修了してもアカデミックなポストは限られ、統計によれば、企業に研究者として就職することの難しさは、他の分野より難しい。このままだとバイオ研究を目指す学生は減る恐れがある。奨学金制度の充実などを関係機関に働きかけたい」

次回は8月17日に掲載